

学校体育における新学力観に関する研究

犬 飼 義 秀

緒 言

新しい学力観とその評価がまるで流行語のように、教育現場で用いられている。新しい学力とは、今回の指導要領の改訂、指導要録における相対評価から絶対評価への転換などに呼応して問題とされるようになった感がある。

わが国の教育は明治以来、欧米の教育水準に追いつくため、国民の教育を全国的に徹底・実施することにその主眼が置かれた。その結果は功を奏した反面、画一的・硬直的な側面が出てきた。また、一定の教育水準は確保でき、現在の高校進学率に代表される教育の発展をもたらした。

しかし、世の中が進歩すると共に、社会生活で必要とされる知識や技能の量は、ますます増える一方であり、教えるべき内容は一層拡大の道をたどり続けている。これと並行して進学率は高まり、高学歴社会に移行すると共に、受験戦争も激化した。ところが必要とされる知識の量が多すぎるため、よく理解しながら学習するという手順を踏んでいる余裕がない場合が多い。そこで、丸暗記とそれの機械的反復に頼ることになりやすく、せっかく学習した知識も、表面的・断片的な形骸化した知識に留まり、当初に意図したような学力にすらなりえなくなる。

知識のつめ込みを要求するこの教育体制は、子どもの自発的な興味や知的好奇心を涸らし、学ぶことの意味を見失わせ、無気力、勉強嫌い、不登校、校内暴力など、教育上の様々な歪みをひきおこすに至っている。こういう行きづまりの状況を打破するためにも、学力観の変更が余儀なくされたのである。このように知識中心の教育の結果として、知識・理解・技能は高まったが、本来の学力の中核となる思考力、判断力、表現力、創造力などの能力が欠如しているとの指摘がなされた。¹⁾戦後何回かの教育課程の改訂でもその都度、改善のための努力はなされたが、具体的な学力としての実現は理念に留まっていた。

目まぐるしく変化をとげていくこれからの社会に生きる子どもたちは、今までの社会が要求していたような既成の画一的な知識を習得するだけではすまされない状況に置かれている。いまや新しい時代に生きる人間の生き方や在り方を見直し、それに真にふさわしい学力を身につけなければならない。この点で、新教育課程が「自己教育力」を重視し新しい学力観を打ち出していることは注目する必要がある。

21世紀には、今日以上に進展した高度情報化社会を迎えることとなり、多様な情報が生活の

隅々にまで浸透して行き、学校で学ぶ知識だけでは不十分となるだろう。時にはそれが無効になってしまうかもしれない。新しい時代に生きる人間は、一生涯かけて学習し続けなければならない、そこで生涯学習の素地を培うのが、新しい学校教育の課題となる。

この生涯学習の視点から学力を捉える時、新学習指導要領は、学力の最も重要な要素として、学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応していく能力とを挙げている。つまり学力の基本は、主体的に生きる力そのものだというのである。このことは、すでに学んだことをどれだけ覚えているかが学力なのではなく、これから物事を学んでいく可能性が学力だということであるから、まさに学力観の根本的変更といえる。²⁾

1. 体育における新しい学力観

学力観および学習指導における目標・内容・方法と学習評価との関係は表裏一体の関係にある。したがって学力観とそれに対応する目標・内容・方法が変化すれば、評価についての考え方や方法も変化するのが一般的である。

知識・技術習得中心の学力観から、自己教育力重視の学力観への転換、発達刺激と一斉画一授業を中心とした内容・方法論から、楽しさや喜び、自ら学ぶ意欲の重視、個に応じた指導の重視を柱とする内容・方法論への転換など、教育における質的変革が、今、強く求められている。変革が学校現場においてどれだけ進むか、観や論だけが先行して言葉の上だけの改革に終わらせないためには、質的変革を確かなものにする「評価」、改革の内実と成果を振り返り、見届ける「評価」にまで具体化して、内容の取り扱いや方法の問題を考えておかなければならない。現状では残念ながら、学習指導法の理論や理論に基づく実践方法の発展に比べ、評価に関する実践的研究はやや立ち遅れているように思われる。³⁾

今回改訂された指導要録は、指導要領の改訂趣旨を生かすことを前提に、評価についてはかなり思いきった提案を試みている。すなわち「新しい学力観に立つ評価」と「児童・生徒の可能性を伸ばす評価」を両輪に、「指導に役立つ評価」をより一層重視しようとする立場を明確にして改善されている。自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力の重視、相対的評価に基づくこれまでの「評定」中心の考えから、各教科における「観点別学習状況」の「絶対評価」重視へ、観点項目への形成的評価観の導入、評価の観点を学年や分野ごとに各学校の独自の工夫に委ねたこと、など新しい考えが大幅に導入されている。

生涯スポーツ体系への移行を目指す体育の授業においても、これらの制度的改革と呼応して、あるいはリードする形で、スポーツへの自己評価を主流とする研究が積み重ねられている。⁴⁾

生涯スポーツは、ライフサイクルのそれぞれの段階で自分の好みや能力・適正に合ったスポーツを選択して生活の中へ取り入れて楽しみ、より豊かな人生を形成する営みである。生活内容としてのスポーツは、それ自体の楽しさを求めて自発的、自主的な活動として行われる。生

生涯スポーツは様々に解釈されているけれども、(1) 社会的には「いつでも、どこでも、だれでも、運動・スポーツを実践できる」「ライフステージ・ライフスタイルに合った運動・スポーツの継続的活動」を保証するための学習機会の確保ならびに環境条件整備、(2) 個人的には「生命維持、健康の維持・増進のためのスポーツ」「生活内容を豊かにするための生活向上スポーツ」「自己実現のための生きがいスポーツ」という意味を内包するスポーツ活動である。こうした生涯スポーツの実践、具現化にとって最も重要な体育授業上の課題は「スポーツへの自己教育力」の育成である。

一般に生活の中で行われるスポーツの特徴は、他からの強制なしに、スポーツの主人公となって自分の好きな種目を、自分に合ったやり方で楽しむことができるということである。体育授業が生涯スポーツとの関連性を重視することは、つまり一人ひとりの子どもの選択の自由性を大幅に尊重して、授業を生活の中のスポーツに近づけようということである。人をスポーツに駆り立てる原動力は、運動の魅力と楽しさといってよい。内容が面白いと活動は継続するが、おもしろくないとすぐ飽きてしまう。つまり、運動の持つ固有の魅力や内容のおもしろさが主体的な学習のエネルギーを引き出す。生涯スポーツとの関連を重視する体育は、授業を生活の中のスポーツに近づけ、それぞれの運動の意味や価値を理解して、固有の楽しさを学習することである。⁵⁾

生涯にわたるスポーツの継続的实践は「だれからも強制されずに、好きな内容(種目)をマイペースで活動する」という形で行われるのが一般的である。選択された活動が継続し、生活内容となるには、何よりも活動していること自体が「楽しい」という意識や、その活動に「価値を認めている」ことが大切である。今まで出来なかったことができるようになる、以前と比べて力がつき技能が伸びたことが自分で分かる、努力すれば何とかかなりそうだという自信が生まれる、などが活動を支える動機づけとして重要になる。したがって、このような内発的動機に支えられた自己教育力をいかに育てるかが、体育授業における学力観として求められている今日的課題といえよう。

2. 体育の授業における「自己教育力」の育成

(1) 何をいかに学ばせるか

スポーツを主体的に生活の中に位置づけ自らの人生を豊かに創造していける人間、スポーツを対象化し客観化し正しい判断のできる人間、このような意味でのスポーツ的な自立が自己教育力にとって具体的で大切な目標になる。さらに、生涯スポーツに向けて必要とされる一定の知識や技術を身につけることよりも、絶えず変化していく新しい現実場面に対応し、主体的に創造的に即応していく力を育てることが大切である。スポーツへの価値の認識と自己への意味づけを重視することは、たくましい力の形成に結びつくものとなる。そのためには「生涯スポ

一ツにおける、自発的で創造的な、まとまりを持ったスポーツ生活のモデル」のとして単元を構成し、それを児童・生徒が自発的・主体的に体験しながら学習することが重要である。自らの学習のねらいへ向けて、問題や課題を自ら発見し、それを自らの創意工夫によって解決していく過程が大切になる。⁶⁾これには教師を含む周囲の協力を主体的に得たり、様々な学習資料を主体的に選択し活用し、学習の過程や結果を自ら評価する、といった学習活動がすべての子どもに保証されなくてはならない。またここでの技術や知識の学習は、生涯スポーツの準備のためというよりも、この単元としてのスポーツ生活をより豊かな楽しいものにするための問題や課題の発見、その解決をめぐる重要な手掛かり(内容)として位置づくことになる。カリキュラムについていえば、このような学習を可能にする運動の選定と配列の再検討が必要になる。それは学習者にとって生活内容として意味ある運動を、発達に応じて配列することが重要になる。「今持っている能力が、十分に発揮できる運動」を発達の段階に応じて、豊かな創意工夫を加えながら楽しむ、このような学習を小学校から段階的に繰り返すことで子どもたちはその力を育てていくのである。

授業は目標を持った学習・指導活動の流れであるから、単元計画は目標にいたる道筋の要点を中心に立てられる。運動への自発性は、種目が持っている固有の魅力(楽しさ、おもしろさ)から出てくるのであるから、この意味での運動の特性(一般的特性)を核にして、ねらいと道筋が示されれば、自発的な学習が期待できる。したがって、この特性がそのまま単元の学習のねらいに位置づき、さらにこの学習のねらいがいくつかに分節されて示されれば、これが学習の道筋(過程)になる。しかし、各種目は一般的に考えられる魅力を持っているとしても、子どもの中にはその種目を嫌う者、避けたがる者もいる。この個人差に注目して、何が学習の障害や抵抗になるかを教師がつかむ必要がある。つまり子どもから見た特性を把握しなければならない。そしていつ、どこで、どのような工夫をして学習を進めるのか、それに対する教師の指導活動を予定すれば、計画の骨格ができて上がる。そのため教師の指導性の主要な部分は、この単元計画の立案で発揮されることになる。

「はじめの段階(導入)」で、学習のねらい、道筋、学習の仕方・進め方が理解できれば、「なかの段階(展開)」から子どもたちは教師を離れて自発的な学習を進めることになる。教師は、この自発的な学習を支援するために、子どもから離れて、授業を対象化し客観化して、適切な観察、間接的な指導・直接的な指導を行い、必要に応じ計画の修正を行う。「まとめの段階(整理)」では、子どもたちは、学習を反省・評価し、教師はそれを支援する。

子どもは、運動の魅力に導かれ、ねらいを持ち、創意工夫してねらいの達成へ向けた活動を展開し、そして評価・反省する。このような学習が積極的に繰り返される。これが自発的な学習であり、自己教育力を高めることにつながる。

(2) 子どもたちに求める態度・能力

自己教育力を培う授業で求められる児童生徒の姿およびその条件とは、どのようなものであ

ろうか。まず、学習者自身が現在の自分のでき具合ややり方をつかみ、新しい課題に取り組むために必要な技能や知識をどれだけ持っているかを自ら把握する。そのことを前提として、何を学習するのかをはっきりつかみ、自分の課題を決定する。つまり、努力しがいのある課題の選択と提示から学ぶことの意味が分かる。活動主題の意味、学習することの価値・楽しさを理解し体験する。そのためには自ら計画を立て、どのような方法で学習するのかを選択・決定できる能力が求められる。学習過程においては、学んだ結果をそれぞれの段階で振り返り、自ら修正・補充しながら最後まで成し遂げる。それは児童生徒相互の協力、高め合う活動により、さらに拡大・深化が図られる。最後に、目標に照らして自己の変容を的確に把握し達成の喜びを味わう。こういう姿を学習過程で具現化することが求められているといえよう。

つまり、これからの授業では児童生徒一人ひとりに自ら学ぶ意欲や能力を身につけさせることが最も大切となるから、運動者自身が自らの能力を判断して自らのめあてを決め、方法を選んで実施し、結果を見て修正する、という「自己評価」活動を学習過程に位置づけ、工夫することが大切となる。

このことは自己教育力には、「教えられる自己と教える自己」「主体的な自己と客体的な自己」とが一人の中で区別されていることの大切さを示唆することになる。批判し、激励するもう一人の自己が存在し、自らの活動や伸びを課題に照らして点検し、成功・失敗の原因を考え、それを自己強化につなげるなどが重要となる。

3. 教育力を高める評価

(1) 新しい学力観にともなう評価

体育の学習指導においては、これまでの運動の技能を中心として態度や知識を加味した評価の内容設定に、かなりの修正が求められることになる。指導要録の改訂にともなって提示された評価の観点は次の4点である。

- (1) 運動や健康・安全への関心・意欲・態度
- (2) 運動や健康・安全についての思考・判断
- (3) 運動の技能
- (4) 健康・安全についての知識・理解

「関心・意欲」「思考・判断」「技能」そして「知識・理解」の4つの領域であること、(1)から(4)に示されるような順序が重要度を意味していることなど留意すべきことがらである。これまでの技能中心の考え方からすれば大きな変化である。しかし、この順位はあくまでも相対的なものであり、実際には四者はそれぞれ相互に深く関わりを持つものであり、独立して存在するものではない。意欲が高いものは技能も高く知識や理解の度合いも深いものであろうし、深いゆえに意欲が増すという関係も生じるであろう。これまでの技能中心、知識中心の評価観

から脱却し、技能や知識を習得する過程における意欲や判断こそ重視しようとする新しい学力観に沿ってこれらを順位づけたものであることを理解する必要がある。

評価の方法に関しても、これまで以上に多角的に対応しなければならないだろう。自己評価や相互評価を毎時間繰り返し行うことによって、自らの状況を常に把握し理解しながら学習の目標や具体的な進め方のプログラムを持つことが、意欲的に学習に取り組むための基本になる。技能の評価尺度の工夫はその運動の特性や楽しみ方・親しみ方を十分考慮して、個別的・多角的になされねばならない。教師の観察も「意欲」などについては単に意欲的に授業に臨んでいからよとするのではなく、何が意欲的たらしめているのか、より深い観察が必要となる。

(2) 学習段階での評価

自己教育力を培う授業を具体化するために、学習過程に沿って児童・生徒の自己評価と関連させながら述べれば次のようなことが大切である。導入時の評価としては、現在の分かり方、でき具合はどうか、この単位ではどんな願いを実現したいか、を「欲求と意欲」「行動の仕方」「技能・ルール」の三つの側面から、現在の自分の力を正しく自己診断できるような項目を検討し、子ども一人ひとりに自分の力をつかませることが大切である。「欲求と意欲」は、その種目に対する興味・関心、好き嫌い、「行動の仕方」は、自分に合っためあてを持ち、練習の仕方や行動の仕方を工夫し仲間と協力できるか、「技能・ルール」は、どんなことができて、どんなことができないか、ルールの理解度などについてである。次に、学習活動が展開される中においては、「めあての選択と設定」→「めあて達成のための練習」→「活動の反省と達成度の確かめ」→「新しいめあて」というサイクルでのスパイラルな学習と自己評価が行われる。ここでは、めあてを学習内容の特性を示す動きのレベルで捉えておくことと、記録があるものについてはタイム・距離・高さ等でレベルを確かめること、記録のないものについては技術内容やその具体的な姿で、自己評価基準を持つことが大切である。最終的なまとめの段階では、めあてが達成できたか、どんな技術内容がどれだけ身についたか、どんな学び方が身についたか、その運動は自分にとってどんな意味や価値があったかをつかませることが大切となる。

(3) 自己評価力の形成

自ら立てた計画に従って学習活動が展開されていれば、到達すべき目標と計画が自覚されているから、そのプロセスや成果の評価は自らやりやすくなる。単元の「はじめ」の段階では、学習のねらいや学習の進め方を理解する時間をゆとりを持って確保し、単元全体のめあてと見通しを児童・生徒一人ひとりに明確につかませることが必要である。毎時の授業でもめあてを正しく認識して活動させることは重要であるが、そのめあてが適切であるかどうか、めあてに向かった活動のステップや学習方法が正しいかどうかを自己評価するには、学習者が自己評価に使える一定のものさし（評価基準）が準備される必要がある。それは、この単位での最終的な到達目標、各段階でのでき具合を示す評価の観点が明示されていること。児童・生徒一人一人は自らのめあてに照らして、でき具合をその基準で判断しながら、どこまで到達したか

を自発的に評価することになり、その中からまた新しい学習のめあても自覚されることになる。

成功した時の「やった」という喜びを「よし、もう一度やろう」「新しい技に挑戦しよう」という意欲に転化すること、失敗した時の「だめだ」という思いを「もうやりたくない」という退行的動機づけにするのではなく、「次はがんばろう」という意欲につなぐことなど、学習過程に生起する様々な情緒的反応をプラスの活動に転化するような自己評価活動、つまり「自己強化」につながる評価を工夫することが大切である。この自己評価は、自らの活動から生ずるフィードバック情報によってなされるものであるから、本来的には自動的なプロセスであるが、子ども相互の助言や手助けや教師による称賛・激励という外からの評価を加えることによって、動機づけの面でプラスに作用することが多い。特に自己評価能力が十分に育っていない小学校低・中学年の子どもの場合には、内発的動機づけを強めるような外から評価を加えることが極めて有効である。授業の中で一人ひとりの子どもが、先生や級友からほめられたり、励まされたりしながら、みんなで「できた」「やった」という歓声がしばしば起こるようになった時には、自己評価・相互評価による評価情報がプラスに機能して、自己評価が十分に働いている時である。

評価は本来、客観的・理性的なものでなければならないが、自己評価の場合、むしろ主観的・感情的反応を動機づけの面でプラスに転化するような指導技術を教師が身につけることも大切である。

自ら学び続けるためには学習の仕方が分かる、その方法を選べる必要がある。自分の学習活動を振り返り「どんな学び方をしたか」「何がどれだけ分かり、どこが難しかったか」などの視点から学習の仕方に関する情報を得て、自らの学び方を修正したり、工夫するなど、学習過程に対する心的制御ができるようになると自己学習は楽になる。自己評価は、学習の結果としての到達度だけにその関心が向けられるだけではなく、学習の進め方やプロセスに着目した評価にむしろ力点を置くよう指導されねばならない。複数の学習コースや場づくり・ルールづくり、それらに対応した形成的評価ができる学習シートづくりなど、教師側の周到な準備が不可欠である。こうした学び方の自己点検を通して、自分の学び方の長所や欠点をつかむことができるようになれば学習は面白くなり、本当に「個」に即したものとなるであろう。

生涯スポーツ時代の体育の授業のあり方をスポーツへの自己教育力の育成と自己評価の視点から検討してきたが、新しい授業の創造や改善にとって評価はある意味では、その成否を左右する働きを持つものであろう。それは改善の具体化のために、授業過程に評価がどのように組み込まれ、生かされるかが重要だからである。子どもの自己教育力・自己評価能力を高める授業の設計と実施、その集積を次回の授業にフィードバックし、教師自身の授業改善につなぎ、さらには教師自身の自己改革と自己教育力の向上に機能することが望まれる。

参 考 文 献

- 1) 清水利信『学力構造の心理学』, 金子書房, 1978, pp. 32—44.
- 2) 橋本重治『新・教育評価法総説上巻』, 金子書房, 1976, P. 68.
- 3) 滝沢武久「いま学力のある子どもとは」, 『児童心理』, 1993年9月号, pp. 1—8.
- 4) 八代 勉「体育における新しい学力観に基づく評価の考え方」, 『学校体育』, 1193年4月号, PP. 14—16.
- 5) 團 琢磨「スポーツの主人公をめざす中・高校体育のあり方」, 『学校体育』, 1992年2月号, PP. 10—13.
- 6) 永島惇正「スポーツの主人公をめざす将来の方向」, 『学校体育』, 1991年4月号, PP. 22—25.
- 7) 佐伯 胖『岩波講座・教育の方法3』, 岩波書店, 1984年.
- 8) 「改訂学習指導要領の考え方と内容の解説」, 『学校体育』, 1989年7月増刊号.
- 9) 梶田亘一『教育評価(第2版)』, 有斐閣, 1992.

(平成5年11月30日受理)